白金薮

6月号

平成30年6月発行　　第88号

定例句会（毎月第三金曜日　アビスタ会議室）

七月二十日（金）蓮見船（九時半小池ボート）正午～三時第五
九月二十一日（金）第五室正午～三時：
九月二十八日（金）小名木川畔吟行句会中川番所跡資料室

兼題句参考句　七月二十日分（蓮見船）

私乗れば少し沈むか蓮見舟　増田悦子
蓮葉酒の宴にとび込む銀やんま　増田陽一
散蓮華水脈広がりて流れゆく　浅野正美
蓮酒を阿片患者のごとく嚥む　松村幸一
猪牙舟に触れ蓮弁の外れたり　佐藤宏之助
象鼻杯象の鼻ほど高く挙げ　武者昭七

月例句会報（'18／6／15　8名欠4　簗、夏の蝶）

魚もろとも簗簀を上り水飛沫　光成高志
簗打って村の伝統修復す
夏の蝶付かず離れず楓の葉
人参の落花小麦粉紛らはし
梅雨の弔ひCメール打つ関ケ原

水逝きて簗に漉さるる鮒や鯉　増田陽一
焼酎を提げ帰るみち牛膝いのこづち
朝刊や鼠鳴きする扇風機
雨量計荒涼とあり竹煮草
夏蝶ねむるこの森に眠りたし

力士ころげ落つ羅に見守られ　松村幸一
遊びをやせむとあぢさゐ始まりぬ
夏蝶の舞ふも沈むも崇徳陵
簗を守る月がありけり峰の空
とどろける雨中の簗の在りどころ

いつのまに群がる森の夏の蝶　光　みち
青田中一本松と墓十基
簗作つくる男見てゐる山烏
手を振って母死に給ふ梅雨青し

城跡に駅舎のありて梅雨晴間

追分を聴けば嘶く祭馬
母の日の母よどどんぱ踊ろうか
鬚根よりつぎつぎ孵る目高の子
那須岳の主峰に向けて簗を組む
万象に影映し飛ぶ夏の蝶

佐藤宏之助

枇杷をもぐ届かぬところ鳥のぶん
簗の上姿くねらせ跳ねる魚
表札に逝きし夫の名濃紫陽花
舞ひ下りる好きな花あり夏の蝶
折戸茄子家康好きと旅で知る

浅野正美

どくだみを十薬として増やしをり
魚跳ねる音し簗守声高し
曇り日の心を灯す花柘榴
墓までを先駆けとして夏の蝶

吉羽多美子

酢のききしすし飯あふぐ梅雨入かな

夏蝶の羽化や天地のしづもれり
ひとひらの天の慈悲とも夏の蝶
簗つくるひかりの束を結はえつつ
簗守に水かげろふの顔ひとつ
ロイヤルウエディングめくる薫風卓の上

仲本興正

新緑のすつぽり包む宿場街
大輪の白き花散る五月闇
郭公の声の響かふ朝の市
思ひやる遊路はるかな北帰行
深更に咲く花なりき月下香

武者昭七

夏蝶やをみなに埋もるのど仏
葭騒ぐなり五月雨蝶秀先
手囲ひに蛍袋を懐かしむ
コンクリート堰の片隅簗かける

飯田孝三

犬死んで十年の狭庭夏の蝶　田宮敦子

子をあやす赤いサリーや初夏の風
フワリと来フワリと離れ揚羽蝶
石段に止ったままの夏の蝶
朝餌待つ猫の正座や初夏の風
ありんこを指で追う子と父親と　磯目健二

菅笠の簗守一服の煙管かな
菖蒲田を彷徨ふ蝶の行きどころ
簗に魚置き去りにして川無情
簗の鮎やがて火刑とつゆ知らず
梅雨明けの蝶道連れに帰省かな　光成高志

一句鑑賞

手を振って母死に給ふ梅雨青し　みち

施設に見舞われた姉の電話を聞いたみちさんがこういう句を投句された。私の配偶者であるので、すぐ作者が分ったが作品本位で〇を付けた。梅雨青しがよく利いていると思う。「妻とあればいずこも家郷梅雨青し」の誓子先生の句を思い出しますが、この句と遠く響いていると思います。何より茂吉の短歌「のど赤き玄鳥（つばくらめ）ふたつ屋梁（はり）にゐて足乳根（たらちね）の母は死にたまふなり」は直ぐ思われます。己の感情を季語に預けて、恰も非情の句のようになっているのがいいと思います。

簗を守る月がありけり峰の空　幸一

簗を守るかのような夏の月が峰の上の空にあった景色を見たことがありますという回想の句です。現代の観光簗と違ってどこか山峡の谷川ではないでしょうか。誰も見ていないと思って悪事を働いても月は見てゐるのだという御院さんの法談を聞いた余韻の中で選をしました。

郭公の声の響かふ朝の市　昭七

山国の朝市に行って郭公の声を聞いた時の感動を書き留めたのでしょう。早朝の高原の澄んだ空気を響かせて遠くから聞えてくる郭公の声は心耳に残るものです。

朝刊や鼠鳴きする扇風機　陽一

朝刊を読みながらの朝食の部屋の隅に扇風機が首を振って廻っています。右に振れた時決まって鼠が鳴くようにキーキー音を出す。これは昔聞いた都都逸の、儘にしやんせと嬉しく解けば帯も察して鼠鳴きではないか、とかなんとか、陽一さんの妻思いの一瞬でした。

枇杷をもぐ届かぬところ鳥のぶん　　正美

枇杷採りのところ、届かぬところは鳥にあげるよ、そこは鳥の分ですよ、というところを鳥のぶんと平仮名で書いた所が面白いと思いました。今もそう思います。

追分を聴けば嘶く祭馬　　宏之助

馬子唄の追分節を聴いた馬が嘶いて祭に応えたという句。ほんとかなと思いますが、作者がそう思ったと断定したそれを読者の私が首肯したということです。因みに信濃追分アキタホイの歌詞は、浅間根腰の　ア　キタホイ　焼野の中でヨー　ホイ　あやめ咲くとは　ア　キタホイ云々と尺八の伴奏で歌われる哀愁帯びた民謡です。

一句鑑賞　　磯目健二

ひとひらの天の慈悲とも夏の蝶　　興正

まるで悲母観音が赤子に垂らす霊水の一滴一滴のように頭上をひらひらと優美に舞うアゲハチョウ。身近にアゲハチョウに巡り会えたということだけでも、天恵の慈悲にあずかったに等しいと、作者は喜んでいる。

とどろける雨中の簗の在りどころ　　幸一

降り続く梅雨に川の眺望も霞んで、普段ならはっきり見える簗場が、それと今は分からない。だが増水した流れでいちだんと高く川音が聞こえてくる方向に、簗があることは納得できる。

那須岳の主峰に向けて簗を組む　　宏之助

那須岳山麓に発して那須野が原を流れ下る大河が那珂川だが、その中流・支流は鮎捕獲の簗が多いことで有名だ。広漠たる平原のどこからも、西に那須岳連峰が望まれる。白煙をあげる主峰茶臼岳が遠望できる川上に簗口を向けて、杭を打ち簀で簗を組み立てるのである。

簗つくる男見てゐる山烏　　みち

烏は、古来から狡猾貪欲で話題になってきた。ゴミ収集場所を烏が高みから虎視眈々と看視するのは、日常見慣れた光景だがこの句は、土地の男たちが梁を架けている現場近くの樹木に止まって、烏が見下ろしているのである。将来の餌場と考えているかもと、なにやら意味深にも読み取れる。この烏は、冬の渡り鳥であるミヤマカラスではなく、年中山野に棲むハシボソカラスであろう。

簗を守る月がありけり峰の空　　幸一

今しも山峡に月がのぼってきた。月光のもと谷川に架けられた簗が視野に浮かんでくる。その簗を空の月がまるで見守っているようだ。去来の「岩鼻やこゝにもひとり月の客」のように、作者も月の夜のその場に身を置いているのである。

夏蝶の羽化や天地のしづもれり　　興正

蝶にとって羽化は、蛹が繭を出て成虫になる最後の関

門であり最大の試練のときである。これを無事に越えて初めて広い自然界へ新しき生命体は飛躍できる。羽化は、深夜から明け方にかけて天地の静粛な時間帯に営まれることが多いといわれる。

子をあやす赤いサリーや初夏の風　　敦子

一枚布のインド民族衣裳サリーを纏って幼子を抱く美しい母親が、爽やかな五月の風に吹かれている。女優モンローの「スカートの風のシーン」は有名だが、サリーは足元まで覆う長い裾なので、たとえ翻ってもその印象はないであろう。名画ラファエロの聖母を想起させる。

一句鑑賞　　増田陽一

夏蝶の舞ふも沈むも崇徳陵　　幸一

崇徳陵とあるからには保元の乱のイメージが浮ぶ。天皇家、摂関家、源平を巻き込んだ争乱に敗れ、讃岐の国に流された崇徳上皇の陵に夏蝶が舞い狂う。この「舞うも沈むも」が配流の上皇の怨念という連想を誘って止まない。句の本質とは関係はないけれど、何蝶であろう、と考えてみるのも一興。讃岐だから南方系の蝶で、名もミカドアゲハ（帝揚羽）と考えては如何であろうか。

梅雨の弔ひCメール打つ関ヶ原　　高志

これも私小説的動因は別として、句としては歴史ものと受けとれる。即ち、「弔い」と「関ヶ原」とあるからこれは天下分け目の合戦であり、その敗将の霊に向かって最新の「Cメール」を使って梅雨の涙の如き弔いの電波を届かせようとするのか。時代のちぐはぐ感が極端で面白い。作者には贔屓にしている敗将がいるのであろうか、こういう諧謔を含んだ歴史ものの句は嘗て蕪村などにもあったようだ。

手囲ひに蛍袋を懐かしむ　　孝三

ホタルブクロは桔梗科の草花で、花弁が釣鐘形の薄い袋となり、そこにホタルを入れると中で明滅する蛍火が透けて見える。花期と蛍の出現期が合っているのか、昔はよく知られた優雅な季節の遊びだったけれど忘れられた形である。掲句にはその花を「手囲い」にして少年時の情緒を懐かしんでいる姿が見える。

一句鑑賞　（87号分）　　武者昭七

母の日やいくたび問へど百といふ　　みち

「おかあさん、いくつになったけえ?」「うるさいねえ。なんども。わたしゃ百だよ」何度聞いても同じ答えだ。ボケているのではない。百を超えてもなお生きるぞという決意表明なのだ。その意気やよし。

真白玉いさかひても妻在りし日よ　　幸一

「白玉」はいかにも夏にふさわしい冷菓。「真」それをほ

めていう冠詞。白玉好きな仲のいい夫婦にもその分けようをめぐって時には紛争がおきる。そんなことがあっても先立たれてみればやはりそんな在りし日がなつかしい。いやそんなこともあったからこそなつかしいのだ。妻恋の悲歌。

烏瓜船頭の顎長かりき　　敦子

川下りの船で出会った船頭だろうか。船底に腰下した瞬間気づいたのは竿をあやつる船頭さんの顎の長さ。さっき乗り場で見た烏瓜に重なる。感心しているうちに船がでる。波にゆられて長い顎もゆらゆら。愉快な旅のひと時だった。今も烏瓜見れば思い出す。旅の楽しさだ。

母の日やズボン丈つめ杖ついて　　正美

トシとともに背丈がちぢんでくる。ズボンの裾があまってくる。あゝ、また三センチちぢんだなどと嘆くこのごろだ。しかいズボンのたけを詰め杖をついて歩まねばならぬとしても、元気に歩きまわれるのはさいわいだ。

年重ね母のゐること母の日や　　〃

贈り物があろうがあるまいがそんなことは関係ない。年を経た母親がそばにいてくれる毎日こそが母の日なのだ。深い共感をさそう句である。

松落葉黒潮遠く離りつつ　　陽一

潮が引いて行った後に波の忘れて行った松の落葉の山。千本松原などとよばれる海岸の情景だろうか。遠ざかっていく潮騒の音が聞こえてくる。大きな情景が吐き出すかすかなさびしさ。

俳窓評論纂

＊5.26 人生の贈りもの―人生上出来でございました　という題で樹木希林さんが14回の人生を語ってお終いにしている。今年一月で75歳の後期高齢者の仲間入り。ここまで十分生かしてもらったなあ、って思っています。私、自分の身体は自分のものだと考えていました。とんでもない。この身体は借りものなんですよね。最近、そう思うようになりました。借りものの身体の中に、こういう性格のものが入っているんだ、と。これだけ長くがんと付き合っているとね、「いつかは死ぬ」じゃなくて「いつでも死ぬ」という感覚なんです。でも借りていたものをお返しするんだと考えると、すごく楽ですよね。日本映画界にも、これを描きたいという意思をしっかり持った若い人が出てきましたね。すごくいいんじゃない？日本って、東洋と西洋の思想をうまく料理出来るお国柄だから、すごい映画ができると思う。監督も役者も、もう少し層が厚くなってくると、とても楽しみだわね。今なら自信を持ってこう云えます。今日までの人生、上出来でございました。これにて、おいとまいたします。（おわ

り）（こういう文章は感想など書かない方がいい。そのまま味わえばいいものですね。詳しくは検索して読めます。）

＊社会面に三島由紀夫賞・山本周五郎賞決まるとあって三島賞は小谷田奈月さん（36）の無限の玄（早稲田文学増刊女性号）に決まったと17日に出て、5.26に受賞者の顔写真と共にひと欄に掲載された。この姓の女性、私はつい最近筍を差し上げた畑の前の家の方と同じなので驚いた。ゴミゼロの日にその父上のNさんにたずねたら、娘婿の妹さんということであった。そのご縁でここに書いた。ただそれだけですが、三島由紀夫の初期の小説のモチーフになっている同性愛者とか、今回は登場人物がすべて男性、しかも玄は女嫌いだ、というもの。著者は男性とか女性とかではなく一人の表現者として、女性であることを乗り越えて作品を作っていきたい、と云っている。生半可の女性ではなさそうである。美輪明宏さん流の中性人間を目指しているのかしら。

＊5.27俳句時評は目利きと賞　青木亮人　が載った。現俳壇には虚子や龍太のような目利きがいない。それを長谷川櫂が嘆いているという出だしで、芝不器男俳句新人賞にふれて今年の受賞者生駒大祐（30）の句を紹介している。「足跡の海中に絶え初明り」「秋燕の記憶薄れて空ばかり」海や空に人の気配が漂いつつ、明晰で透き通った世界に曙光がさしそめ、青空のみ広がりゆく・・生駒の句は内容を理解して分る作品ではない。分るとは異なる次元で、言葉や気配そのものが読後にたなびくように漂う点が凄いのだ。生駒は凄い傑作を詠む可能性を秘めた俳人だ。この世に生きる不思議さのただ中で、子どものように首をかしげ、たたずむ気配を詠みうる感性は感嘆の他ない。「六月に生まれて鈴をよく拾ふ」（大祐）以上で結んでいる。随分褒められたものである。著者は愛媛大で俳句学を教えている準教授。同氏は、左の「オルガン」という季刊の俳誌の句群を評している。

目の玉を押すと蚊帳吊草が立つ　鴇田　智哉
灰もなく秋の蛍は消えて以後　福田　若之
右の手でみづうみ秋が細長く　宮本佳世乃
歯車がまはり鶏頭並び立つ　生駒　大祐
絵の奥の菊を見つめて未成年　田島　健一

分かりやすい内容や意味を伝えるというより、有季定型でしか表現しえない世界観や表現そのものを作品に昇華した句群といえるでしょう。鴇田句は「～押すと」「～が立つ」の動詞に意味深な実感がこもり、福田句は「も・は」が一句に屈折をもたらし、宮本句は「右の手でみづうみ」における省略と切れが詩情を漂わせている。「歯車／鶏頭」の取り合わせを狙ったというより、作者には確

かにそう見えたと感じさせる生駒句、また平易な表現で読ませつつ突如「未成年」で句を閉じてしまう田島句。万人受けする共感や安易な「内容」を優先せず、一筋縄でいかない世界像を読者に問いかける句群であり、このような作品を詠む俳人が集い、熱気とともに同人誌を刊行したことにある感慨を覚えます、と。

＊健二さんより「取合せ」て「とりはやす」という手法―芭蕉から田中裕明へ―（前編）『俳句』2017.12 同後編『俳句』2018.1 堀切実　のコピーを頂いた。許六の俳諧問答の自得発明の弁を取り上げて現代風に論じたもの。去来との問答という論争の書であるが、許六の「発句は畢竟取り合す物とおもひ侍るべし。二つ取合て、よくとりはやすを上手と云也といへり。ありがたきおしへ也」を取り上げて取合せにとりはやす詞を媒介させたもの、その詞のないものと例句をあげて分析した論文。句のイメージの範囲内で取り合わせるものを曲輪の中、範囲外のものを曲輪の外と云っているので、その例句をあげて説明している。例句を近現代俳句からも拾っている。例えば、万緑の中や吾子の歯生え初むる（草田男）生え初むるがとりはやし詞、瓦礫みな人間のもの犬ふぐり（ムツオ）は中七の人間のものに生と死の両面が映し出されていることでとりはやしが成功している。その論文の後編にて誓子先生の写生構成論を紹介している。映画のモンタージュ理論を参考にしているのは衆知のこと。構成するものに内なる情緒の結合と外なる形象の結合とがあると分析されているとしているのは、私の解釈ではメカニズムの内と外ということである。ピストルがプールの硬き面にひびき、とか、瞬間に湾曲の鉄寒曝し、などが視覚聴覚触覚などのイメージの働きにより心の内を表現する写生構成の手法である。現代俳句では夭折した田中裕明が新しい感覚の取り合わせ句を得意としていた。鮎落ちてくるぶしは風過ぎにけり　は鮎が川を下ることと、踝を風が吹き過ぎたということは、何の因果関係もない。二つは余白で区切られていると評し、余白とは二物の間に存在する関係性とか、二物が作り出すかたちというようなもので、ことばでは明示されていないが、確実に実体があるものだと論じた四ツ谷龍の説を紹介している。穴惑ばらの刺繍を身につけて　も薔薇の花の形と、穴惑の蛇のとぐろを巻く姿に共通する渦が余白の中身を表していると説く。この余白の機能の視点から、小川軽舟の雪舟は多くのこらず秋蛍、悉く全集にあり衣被をあげている。また、澤の仁平勝の写生神話を打ち破ったことが田中の史的意義と持ち上げてている。球場を出てくる春のホルンかな、がそうだと。選択眼が作者の個性であると。

田中亜美も同論を澤で述べている。葡萄いろの空とおもひし貝割菜、も二物衝撃の形式なのだが、繰り返し読むうちに、にぶつの間によこたわる境界が溶解してゆくような不思議な感覚に陥る、と述べて、二つの物の繋いでいるのが、おもひし、という詞であり、これがまさにとりはやし詞であると。これは二物配合でも二物衝撃といった概念化の網の目をすりぬけたものを芭蕉は取合せの本来の意味だと言っている。関悦史の紫雲英草まるく敷き詰め子が二人、の分析、更に先にあげた青木亮人の同評がある。余白の効用だと。残りは著者の田中裕明句の分類評論である。最後に田中裕明の取り合わせ句はほとんどが曲輪の外の発想によるもの、主流がとりはやし詞を介さない自然なとりはやしによるものであると結論している。余白の効用、媒介性、二物の溶解していくような感覚と云った諸家の評を自ずから受け入れるもの。これも許六の説く名人芭蕉の取合せ論に通じている。田中裕明の感性と現代感覚が加わってのことだが、句の構造だけからでは説明できないことばの美だろうかと、これを今後の課題としている。（長い紹介になった。現代俳句に直接論評しているからどうしてこうなる。堀切実さんは今私がやろうとしていることを既にやっている早稲田の先生らしい。でも、私なりの論もあるので、芭蕉の軽み以後はまだ続ける。結社の意義もこの論評からも想起されるだろう。誓子先生の正反合のメカニズム論も包含しているし、私の電気や力学に類似の理論で説明できる。アナロジーである。水と電気はアナロジーであるように取合せは誓子先生の写生構成もこれで説明できるし、それが分る連衆と阿吽の呼吸、以心伝心で俳句を楽しむのが結社の結社たる所以のものと思うからである。）

＊先月の芭蕉覚え書のその二　臼井吉見著：去来抄にある「うらやましおもひ切時猫の恋」の越人の句を芭蕉が風雅有ものと褒めたのを暁台が逆に俗情あるものと改竄した。小宮豊隆は風雅か俗情かという論考で俗情説をとっている。折口信夫は恋の座という評論で風雅説をとった。なま温かくて、色情的で、清潔なものを感じないからと言って、之を俳諧的でないと言ふ受け取り方をするなら、其れは古俳諧は勿論、蕉風にも、風馬牛な俳諧になってしまふ。芭蕉は古俳諧の題材の内において、寧改竄修正することを極度に避けて、おし拡げられる限りおし拡げ、含みを持たせられるだけ含みを持たせ、成長させられる限り成長させて、俗悪・低劣を俗悪、低劣なるが為に、愈人生的に深いものの感じられる所まで、其れを普遍化した。そこに蕉風の価値があり、俳諧の意義のある訳である、といっている。これは芭蕉のもやもやした恋の句の境地を越人の句を見て、此れだと思わず叫び

そうになった。その感激を反芻して書いたのが、去来への消息であったものと思うというのが所説の骨子である。芭蕉は猿蓑の古典主義から炭俵の自然主義（折口氏の言葉）の方へ歩いて行こうとした芭蕉の動きを、越人のこの句のうけいれかたの中に見届けている。古典主義的虚構から、身軽な俗な世界へ出て行く訳で、そういう虚構を支える緊張感からの解放が「軽み」であったに違いない。それでも事実尊重の素朴なリアリズムとは所詮無縁だった。現実は虚実分かち難いものであった。元禄の芭蕉はやはり元禄の芭蕉であったという志田義秀の言葉は真実だと結んでいる。（終）

受贈誌（平成30年六月号）

西東忌桜老幹絡み合ひ（彩141号）　平野ひろし

老幹は八岐の大蛇花万朶（〃）　〃

春夜更け岩見音なく時雨過ぐ（〃）　〃

湧水の陽の斑きらきら雛の日（〃）　小林治世

麦青む歩幅広げて歩け歩け（〃）　横川　正

茹でられて釜の筍浮沈み（〃）　篠崎美津江

放置畑シート継目に犬ふぐり（〃）　村瀬米子

枝先の先の先まで糸桜（〃）　鈴木正邦

東京クラブ（6月号）

旅始め湖西線より虹の立つ　栄　武子

梅雨茫茫見馴れし町のうす黒き　璃子

夏つばめ土蔵造りのパン工房　文男

賢治詩　たけにぐさ　武者昭七

詩は二連四行の短いもので賢治病臥中のものである。

たけにぐさに

風が吹いてゐるということである

たけにぐさの群落にも

風が吹いてゐるといふことである

看病の家人か友人が途中で見かけた情景をつげたのであろう。「たけにぐさが揺れていたよ。」賢治のこころはそれだけで騒ぎだす。たけにぐさは荒れ地などに群落をつくるケシの仲間。高さ二メートル。夏に小さな白い花をつける。竹のように茎の中が空洞だからという。ありふれた草だ。しかし一本のたけにぐさは賢治の胸のうちで二本となり三本となり果てはおおいなる群落となって揺らぎだす。かつてはそんな中を転げまわったこともあった。そうして風は賢治にとってなによりも異界からの通信であった。なんど風と交信したことか。しかし今風は無言のまま賢治のそとを吹きすぎていく。そのさびしさ。白鳥は終わりに一声だけ鳴くという。賢治の「白鳥のうた」である。

芭蕉のかるみ以後（閑話休題５）

光成高志

延宝八年庚申桃青三十七歳、田中桐江の在江中荘子を学ぶ。これは芭蕉翁編年誌目黒野鳥編（S．33年）にある。桐江半時庵記に「桃青屡訪二書斎一、叩以二南華一、歳月所積文義頗熟、其廬名二芭蕉一、」とあることから編者は桐江の在江中荘子を学ぶと書かれたのであろう。芭蕉庵と呼ばれたのは翌年の延宝9年（天和元年）のことだから一年早い。また桐江は芭蕉より24歳下であり、この年は13歳でまだ庄内藩にいて江戸には居ない。下調べとして、ウイキペディアを開くと（34）で書いたような伝記が出てくる。本誌の題字を書いて貰った加納綾女さん在住の池田市大廣寺にその墓があるという縁もうれしく思って、田中桐江とは如何なる人物かを少し調べてみた。今はITの検索もできるので便利であるが、それには目黒野鳥編の桐江半時庵記は出て来ない。以前、新井白石の事績を調べた経験から再び国立公文書館に行って検索し「田中桐江伝」（池田史談会発行大正12年一月一日吉田鋭雄編）に至った。芭蕉との接点は年譜の元禄二年の項に、七月山鹿藤助（素行の子）より其の流派を伝授せらる（先哲叢談年表に拠る）・帷を下し徒に授く・この後の事か松尾芭蕉に荘子を講ず、と書かれてある。元禄二年は芭蕉が奥の細道の途上にあって荘子を聴く暇はなかったから、これはこの編者が芭蕉の高名に引かれて桐江伝年譜に書き込んだのではなかろうか。年譜以外の章節を見ていったが、ここしか芭蕉の字はなかった。（17）に既述したように、宗房23才から29才までの六年間は空白の六年間と呼ばれるが、蕪村の洛東芭蕉庵再興記に書かれたように、伊藤担菴に儒を学び云々の項は捏造と考えられるとされている（国文学昭和41年四月号芭蕉と学問、大谷篤蔵著）があるからここでも同じことをやったかと思った。しかしながら、芭蕉と同時代人であることは確かなことであるから、ここで切り捨てずに桐江伝を読んでみた。この田中桐江は、儒者にして武士、隠者であって池田へ移住する道々の東海漫遊詩を311篇も作っている漢詩人であった。桐江伝から桐江の修養の項を読むと、天和三年の條に「二月田省吾黄金一枚を父より受け、其郷を去り江戸へ来る。時に年十六」とあり恐らく修養の為に江戸に出でしならん。貞享二年、十八才の時に六經史漢を卒業し、後文を好み群籍を捜索す。又禪窟に参訪す、とある。その後の年譜の但書は先述の芭蕉に荘子を講ず、がある。この後のことか、と疑問詞かが付いているので桐江伝編者も確たる資料を持っていなかったのであろう。その後は元禄が十六年まで続き宝永、正徳と続くが、芭蕉没年の元禄七年まで年譜に記述はない。桐江伝で興味あるの

はその後のことである。柳沢吉保に仕え、将軍綱吉の講筵に臨む、とか宝永六年綱吉薨ずるや荻生徂徠藩邸を出て市中に住す、家宣の薨去後の正徳三年奸臣を斬って徂徠の家に匿る後奥に出奔し姓名を変ず其途常陸筑波山下に寄寓し剣術を教ゆること三箇月五月下旬仙臺に至り福山の許に住す、とありこれから享保九年五十六才に池田に住すまでは松島や平泉高館などを歴遊し池田に行く道々に東海漫遊稿六巻がなる、と書いてある。池田に移ってから洛に遊ぶ、が見られ、隠棲・漫遊詩人として生きて寛保二年七十五才で没している。この程度の知識を竹橋の公文書館で得て、早速池田に行った。事前に綾女さんが大廣寺の大黒さんに挨拶に行かれてあったので、玄関で資料を頂き雨中の墓地を探して、五月山と称する半腹に墓碑を見つけて写真を撮ることができた。今は現地に行かなくても市のホームページで紹介されているので机上でも見られるが、私は鷗外が墓碑を探して探して見付け、故人にあったが如き悦びの文を書いているのにあやかって現物の前に立ったのである。桐江の墓碑銘は苔むして読めなかったが、市のHPには左の墓碑が公開されている。

桐江先生墓

先生姓富諱逸字日休一字春叟自號桐江釣客生於武陵父諱良次姓田中氏為豊州築城主之臣母辻氏出七子　先生其第六也晩有故変姓名以富為姓者不忘其本姓田也少小讀書好文特長武技及壯仕一藩侯列贅御班後転小相兼弓隊指揮忽朝卓爾遂去適奥與高僧豪士交臂促膝朗吟劇譚十二年而還武陵更隠摂之呉山飽醉煙嵐著述頗多或時遊洛浪探名勝雙鳴鋏一瘦筇高視濶歩至老益壯平生風流蘊籍雖嬰児能訓是歳寛保二年壬戌六月廿六日歿於隠所享年七十五葬於塩山萬松含翠處衲同　先生寓奥時修風雅盟有倶隠雲林之約是以預撰碑文併銘云　深山閬兮　群松蒼兮　道其得兮　節自剛兮竹道人梵柱撰　門人等建之

桐江伝の訓読用返り点などを参考に読んでいくと、先生の姓は富、諱は逸、字日休、一字春叟、自らは桐江釣客と号す。武陵に於いて生れ、父の諱は良次、姓は田中氏、豊州築城主の臣と為る、母は辻氏、七子を出で、先生は其の第六也、晩に故有って姓名を変ず、富を以て姓と為す者は本姓は田を忘れず也、少小にして書を読み文を好む、特に武技に長け、壮に及んで一藩侯に仕え、贅御班に列す、後小相兼弓隊指揮に転ず、忽朝に卓爾、遂去って奥に適い、高僧豪士と共に、臂を交え、膝を促し、朗吟劇譚十二年にして武陵に還る、更に摂之呉山に隠る、煙嵐に飽酔し、著述頗多、或時洛浪に遊び、名勝を探る、雙鳴鋏一瘦筇、高視濶歩、老いに至りて、益々壮、平生

風流蘊籍、嬰児と雖も能く馴れ、この年寛保二年壬戌六月廿六日隠所に於いて没す、享年七十五塩山萬松含翠處に葬らる、先生に同じくして、奥に寓する時、風雅盟を修め、倶に雲林に隠るる約有りて、是を以て碑文の撰に預る、併せて銘に云う、深山閬兮　群松蒼兮　道其得兮　節自剛兮竹道人梵柱撰　門人等建之

竹道人梵柱とは、僧獨麟の事であって、この僧が桐江を池田に招聘したのである。兮は感嘆や強調の語気を表す助詞であり訓読しない。伝の六に性行　があり、それを読むと桐江の為人が想像される。資性高潔にして清節を尚べり、蚤年老荘及び司馬遷の書を読みて、其の文の軼蕩を喜み、寝食を忘れ、英気雄心は耐久のものにあらざるを悟り、深く天下名山大川を跋渉せん事を期せり云々、又、憤然姦邪を斬って出奔せり、その跡頗る侠に似たりと雖も皆其の汚濁を厭棄するの至情に出云々、又、東海の巌子陵を以て自ら任ぜり、子陵は桐江の生平深く私淑し浮慕せる人物なり云々、又、剽窃踏襲は駄目、自ら新意を発し、杼柚を出すに努めたり、其の言に曰く、詩を作るの法は他なし、唯古を師とするにあるのみ云々、又、隠逸なるものは、富貴を以て浮雲となし、名利を以て敝屣となし、塵濁を蝉蛻し、高潔を自ら守る、恰も猶麟鳳芝椿の鶏豚菽菱に於けるが如し云々、又、もと無用のものに似たりと雖も単に無用の物ありとして之を捨つべけんや、隠逸も亦然り云々。これらは大正11年編者の文章である。杼柚とは機織機の横糸を入れる糸巻き、柚は縦糸を巻くもの、私の記憶ではチキリのこと。以上の性行の項を拾い読みして芭蕉に似たところを抜き書きした。なんと芭蕉の性行に似ている事か。なんと荘子を実践していることか。これだけでも十分桐江がわかった。早熟の天才であって、しかもものふの心が骨髄にある隠逸なる風流人であったのだ。芭蕉とどこかで会っているに違いないと私は思った。桐江になくて芭蕉にあるものが後世に名を残した所以であると思った。それは何か。漢詩にはない大和魂ではなかろうか。大和心と云ってもいいもの、和文で書いた紀行文の故ではなかろうか。古人の求めたものを求める心がより痛切であったからであろう。芭蕉が没して30年近く経って桐江が平泉にて左の漢詩を作っている。訪古平泉高館中。冷煙荒艸没英雄。腰間老剣霊光発。昭映秋天萬丈紅。

お便り広場（到着順、敬称略）

電気屋さんに来てもらってどうやらメールが通じるようになったようです。今までのいろいろなご指導・ごめんどうありがとうございました。お礼申し上げます。これからもよろしくおねがいいたします。それにしても慣

れない作業でだいぶつかれたというのが本音です。以上お知らせとお礼まで。体が第一ですあまりせかないで、ゆっくりやってください。（6.5 昭七）

蓮見船吟行の案内有難うございました。これまで散々沼を右往左往してきましたが、舟で手賀大橋を潜るのは初めてなので、蓮華見物とともに今から楽しみです。昨日の源氏講義の帰り道で、話題中の人物名が浮かばず立ち往生しましたが、駅を出た途端、思い出しました。辰野隆です。東大仏文科の名物教授で、門下からは小林秀雄・三好達治・中村光夫など輩出、父親は東京駅・日本銀行などの設計で有名な辰野金吾です。たまたま辰野隆の随想を読み、漱石・鴎外・露伴への傾倒の深さと豊かな眼識に感銘し、随想全集を何冊も入手して読みふけっています。江戸子らしい意地と襟度を秘めた自分の目で大胆に文豪の本質に迫るところ、祖述や瑣末主義の凡百の学者とは大いに異なります。とくに漱石「坊っちゃん」評は、秀逸。生粋の江戸っ子でなければ書けない文章と思いました。コピーして例会に持参します。主宰にもその滋味妙味を味わってもらえたら幸いです。（6.14 健二）

（金吾まで私は出たのですが、辰野金吾フルネームで出ませんでした。東京駅と云えば、深谷の渋沢栄一の煉瓦をすぐ思います。深谷駅は東京駅にそっくり。そのことを話す暇がなかった。）

光成高志様みち様　梅雨宣言したらやはり梅雨っぽくなりました。五月末からずっと忙しくてこの句会報を出してやゝ楽になりましたが、次につゞく用事ありで老人らしくのんびりの日はいつのことやら、です。漱石の一筆箋毟しく頂きながら、御礼も申さずお許しくださいね。猫チャンが居て毟しくなりました。東京クラブは山尾氏がまだリハビリ中で6月22日退院とのことですが、歩行がまだぐ大変なようです。自然の多い我孫子の梅雨景色どんなでしょう。お体にお気をつけてこのうっとうしい日々をやりすごされますように。（6.12 璃子）

六月の句会楽しみにしていましたが、荊妻の退院日が重なり（目の疾患）、出席できなくなりました。残念、左出句五句どうかよろしくお願い致します。御盛会を祈り上げます。（6.14 孝二）

我孫子日記

5/18 例会	
5/23 SOA	
5/24 竹橋	＊
5/28 増田敏雄	
5/29 北総病院	＊2
5/30 SOA	
5/31 池田市	*3
6/1 有馬温泉	*4
6/6 SOA	
6/10～11 竹原	*5
6/12 帰京＆上野	
6/13 SOA	
6/15 例会	

＊　鯉の水輪皇居の濠の菱浮葉　高志

*2　高葭簀窓に立て掛け休憩室　〃　〃

*3　近江の田青田麦田をあちこちに

雨あがり夏の鵯鳴く大廣寺
漆喰の龍の大口梅雨に入る
牡丹歌碑脇に泰山木の花
泰山木の一輪のみの大廣寺
墓地覆ふこんもり雨の楠若葉
墓碑銘をデジカメで撮る梅雨滂沱
青梅雨やつなぐもみじの手のぬくし
*4 六甲山地遅き植田の峠道
夏の蝶楓の葉群なぞる如
有馬温泉夏鶯の鳴く朝
緑陰や炭酸せんべい焼かれゐる
*5 梅雨の弔ひCメール打つ関ケ原
麦秋や列島走る葬の旅
母の骨拾ふ額に汗の粒
手を振って母死に給ふ梅雨青し
ほとゝぎす法会の斎のレトリック
母のこと亡父に頼む梅雨墓参
青葉山九郎神社が裾に建つ
青葉山竹原殿の由来知る
呉線の線路に伸びて枇杷熟るゝ
虹立てり葬儀帰りの多島海

〃　みち
〃　高志
〃　みち
〃　高志
〃　〃
〃　〃
〃　みち
〃　高志
〃　〃
〃　みち
〃　高志
〃　みち
〃　〃
〃　〃
〃　高志
〃　みち
〃　高志

編集後記

今月も沢山書いたようだ。実生活でも西に二回行って帰った。今日は高槻に大地震があってブロック塀が倒れて小学生が亡くなった。直ぐ下に通学路の青線を引いた大人の無知がどうもやりきれない。近江の田に麦秋が増えたように思う。青田と麦田が半々のように見えた。新幹線窓際所見では。昭七さんのメールが来ませんが、ここで後記を書いてお終いにしました。

白金霞六月号（通巻第八八号）平成三十年六月二〇日発行
編集・発行人　光成高志　発行所　二七〇-一一一九　我孫子市南新木一-二四-一七
☎・fax　〇四-七一八七-一〇六八
表紙の題字：加納綾女　同写真は平成三〇年六月一九日の白金霞